

被服の着装効果と顔の形態的因子との関係 についての研究 (第1報)

栃原 きみえ・斉藤 一枝・水口 綾子・池田 恵子

Studies on the Relation between Properly Dressed Clothes and Morphological Factors of Face (I)

K. TOCHIHARA, K. SAITO, A. MIZUGUCHI and K. IKEDA

緒 言

人の個性と被服とは密接な関係にあり、個性は被服の着装効果を大きく左右するものである。審美面から見た場合に、例えば同一被服を同じ年代の人が着装したときに、個性に適合した場合には個性美が生かされ若若しく見えるが、不適合の場合には若さや美しさが失なわれ、欠点のみが目立つものである。このように被服の色、柄、デザイン、材質などが、着装する人によって何故マッチしたりしなかったりするのかが、その要因について理論的に解明されていないのが現状である。人の個性は複雑であり、解明への手がかりを得ることは容易なことではないと思われるが、被服を個性で着ることに関心が高まっている現在、着装と個性との関係を究明することは、被服の教育指導に、また既製服の選択に役だつものと考えられる。そこで個性の要素の中から顔の形態的因子を取りあげ、眉、目、鼻、口の長径、幅径、角度を計測して類型化を試み、顔と個性また被服と個性との関係を検討するための基礎資料を得たので、その一端を報告する。

方 法

1. 研究対象

本学短期大学生 222 名を被験者として、昭和49年～52年に顔を中心に撮影した前面の写真を、 $\frac{1}{2}$ 大に引き伸ばし、間接計測をした。なお撮影方法については、本学紀要20号に報告したので今回は省くことにする。

2. 顔の計測部位

2-1 眉

顔の各因子の類型化を試みるために“図1”に示した各部位の計測を行なうことにしたが、まず眉は眉頭から眉尻までの投影距離と、眉幅の中央を通る実長とを計測して眉長とし、また眉の最大幅を眉幅として計測した。

2-2 目

目は眼頭から眼裂までの長さを眼裂長とし、

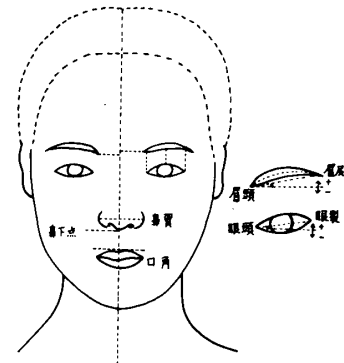


図1 顔の計測部位

目の上縁、下縁間の最大幅を眼開大径とした。

2-3 眉と目の角度

眉は眉頭を基点とした水平線に対する眉尻の角度を計測し、眉尻が上の場合にはプラス、下の場合にはマイナスの記号で表わすことにした。また目は眼頭を基点として眼裂の角度を計測し、眉と同じ記号を用いることにした。

2-4 眉頭間、眼頭間、眉・目間

左右の眉頭間および眼頭間を計測し、また眉と目の間隔では、眼頭、眼裂、その中間の3箇所を計測した。

2-5 鼻

鼻高つまり鼻の長さは、左右の眉頭間位置を結ぶ線と、正中線との交点から正中線に添って鼻下点までとしたが、解剖学上では鼻根点からとなっている。しかし鼻根点は、生体の筋肉の上から触れても分からず、解剖によらなければ明確にできないものとされている。従って本研究では、研究の目的からして、眉頭点位置を用いても支障ないものとした。また左右の鼻翼間の最大径を鼻幅として計測した。

2-6 口

左右の口角間を口裂長とし、また上唇の上縁と下唇の下縁間の最大径を口厚径とした。

以上各部位の計測について述べたが、眉と目は左右ともに計測した。

結果及び考察

1. 眉、目、鼻、口の長径、幅径

顔の外形的因子としての眉、目、鼻、口を前述の方法により計測し、その結果について左右別に、最大、最小、平均、標準偏差を“表1”に示した。左右まとめて平均値で述べると、眉長は実長、投影長ともに約4 cmであるが、投影長より実長の方がやや大の傾向であった。また眉幅は0.6 cm強であった。なお眼裂長は3 cm強、眼開大径は1 cm弱であり、また両眉間は3 cm弱、両目間は4 cm弱であった。さらに鼻高は6 cm強、鼻幅は4 cm弱、口裂長は約4.5 cm、口厚径は2 cm弱であり、顔の各因子のサイズを把握することができた。

表1 眉、目、鼻、口の長径、幅径

計測部位		計測値		L (cm)	S (cm)	M (cm)	S D
眉 長 (投影長)	右			5.30	3.40	4.30	0.388
	左			5.40	3.20	4.25	0.417
眉 長 (実長)	右			5.64	3.44	4.45	0.421
	左			5.80	3.40	4.41	0.448
眉 幅 (太さ)	右			1.00	0.30	0.63	0.145
	左			1.00	0.26	0.63	0.148
眼 裂 長	右			3.60	2.60	3.10	0.222
	左			3.70	2.48	3.01	0.228
眼 開 大 径	右			1.36	0.54	0.97	0.144
	左			1.58	0.56	0.97	0.153
両 眉 間				4.00	1.60	2.88	0.509
両 目 間				4.60	2.50	3.78	0.344
鼻 高				8.30	5.12	6.34	0.484
鼻 幅				4.50	2.48	3.80	0.288
口 裂 長				5.60	3.70	4.58	0.404
口 厚 径				3.32	1.30	1.84	0.281

2. 眉、目の角度

眉および目の角度の計測結果を“表2”に示したが、眉の角度を平均値で見ると、左右ともに約0.8度であった。また最大値は右が14.50度、左が13.80度であり、マイナスの記号つまり下り眉の最大値は右が14.00度、左は11.00度であった。上り眉の最大角度を上端にした場合、下り眉の最大角度は形態上、下端となるため最小値として表現した。なお眉頭を基点とした場合の眉の角度は、プラスの最大値からマイナスの最大値間に大きな差が認められた。

目の角度の平均値は、左右ともに約7度強であるが、右の最大値はプラス19.50度、左は20.00度であり、最小値の右はマイナス3.00度、左はマイナス5.50度であった。

表2 眉、目の角度

計測部位		計測値	L (∠°)	S (∠°)	M (∠°)	S D
眉 角 度	右		14.50	-14.00	0.80	4.961
	左		13.80	-11.00	0.81	4.852
眼 角 度	右		19.50	- 3.00	7.07	3.682
	左		20.00	- 5.50	7.21	3.536

3. 眉、目の長径、幅径の左右差と出現率

顔の因子の左右アンバランスは、個性美としての価値を評価する芸術家もおり、個性の把握に必要と考える。そこで眉、目の長径、幅径の左右差を求めて右が大の場合、左が大の場合に分けて最大、最小、平均値を“表3”に示した。各項目の左右差を平均値で検討してみると、投影長、実長の両者ともに右が大の場合には0.28cm、左が大の場合には0.26cmであった。また眉幅は右大、左大の場合ともに0.07cmであり、眼裂長は右大の場合が0.16cm、左大の場合が0.08cm、眼開大径は0.09cmと0.10cmであった。以上各項目のいずれも左右差が認められたが、平均値での左右差は僅少であった。

次に眉および目の長径、幅径について右が大の者、左が大の者、左右同径の者に分けて出現率をみると、眉の投影長では右が大の者は51.4%と過半数を占め、左が大の者は36.9%、左右同径は11.7%であった。また実長の場合の右が大の者は50.5%、左が大の者は38.7%、左右同径は10.8%であった。なお眉幅の右が大の者は45.5%、左が大の者は40.5%左右同径は14.0%であった。眼裂長では右が大の者は40.1%、左が大の者は41.4%、左右同径は18.5%であり、眼開大径では右が大の者は42.8%、左が大の者は37.8%であり、左右同径は19.4%であった。以上のように眼裂長を除いた各項目は右が大のものが多く、左右同径の者は極めて低い出現率であった。

表3 眉、目の長径、幅径と左右差の出現率

項 目	左右差			右 > 左 (cm)			右 < 左 (cm)		
	右 > 左 (cm)	右 > 左	右 = 左	右 < 左	右 < 左 (cm)	L	S	M	
眉 長 (投影長)	0.9	0.01	0.28	51.4	11.7	36.9	0.9	0.02	0.26
眉 長 (実 長)	1.0	0.02	0.28	50.5	10.8	38.7	0.7	0.02	0.26
眉 幅 (太 さ)	0.2	0.02	0.07	45.5	14.0	40.5	0.2	0.02	0.07
眼 裂 長	0.44	0.02	0.16	40.1	18.5	41.4	0.3	0.02	0.08
眼 開 大 径	0.32	0.02	0.09	42.8	19.4	37.8	0.4	0.02	0.10

4. 眉、目の角度の左右差と出現率

眉と目の角度の左右差と出現率については“表4”に示したが、上り眉、上り目はプラスの記号、下り眉と下り目はマイナスの記号、また角度が水平の場合はゼロの記号で表わした。なお右角度が大の場合、左角度が大の場合に分けて示したが左右差を平均値でみると、右が大の場合では上り眉は3.51度、下り眉は3.33度であり、左が大の場合では上り眉は3.00度、下り眉は3.16度であった。

目の角度はマイナスつまり下り目は出現しなかった。左右差を平均値でみると、プラスの上り眉は、右角度が大の場合3.27度、左が大の場合は3.38度であった。

また右角度が大の者、左角度が大の者、左右同角度の者の出現率を示したが、上り眉で右が大の者は22.1%、左が大の者は30.2%、左右同角度は2.7%であった。一方下り眉で右が大の者は16.2%、左が大の者は13.0%、左右同角度は1.8%であった。なお0度の眉の出現率は5.4%であった。

次に目の角度については右が大の者は42.8%、左が大の者は47.3%、左右同角度は8.0%、左右ともに0度であったのは0.5%と最も低い出現率であった。

以上、眉と目の角度についてはほとんどのものに左右差が認められ、左右同角度はいずれも低い出現率であった。なお表の下に眉および目について、その他の形態として出現率を示したが、その他の形態とは左右どちらか一方がプラス、またはマイナスの角度を持つ複雑な形態であるから特に欄外にとり出して示すことにした。

表4 眉、目の角度と左右差の出現率

項目	左右差	右 > 左 (°)			右>左	右=左	右<左	右 < 左 (°)		
		L	S	M	%	%	%	L	S	M
眉	+	13.0	0.04	3.51	22.1	2.7	30.2	8.0	0.2	3.0
	0					5.4				
	-	9.0	0.2	3.33	16.2	1.8	13.0	9.0	0.8	3.16
目	+	11.0	0.5	3.27	42.8	8.0	47.3	11.0	0.5	3.38
	0					0.5				

○眉のその他の形態……8.6% +……上り

○目のその他の形態……1.4% -……下り

0……水平

5. 眉、目、鼻、口の相関係数

眉、目、鼻、口の相関関係を検討するために、120項目について相関係数を求めたが、“表5”に示したように24項目が1%の危険率で、17項目が5%の危険率で有意であった。つまり120項目中41項目に有意が認められたに過ぎなかった。このことは顔の形態的因子の複雑さを裏付けているものといえよう。しかし以上の41項目中で相関係数が特に大の傾向を示したのは、左右の眉長（実長）間が0.754、眉幅間が0.834、眉角度が0.613、眼裂長が0.570、眼開大径が0.581であり、左右間に高い有意関係を示した。なお被験者個々では、大半の者に左右差が認められたが、サイズとしての差は僅少であり、この事については先に述べた通りである。従って眉と目の類型化のための研究資料としては、左右のどちらか一方でよいと判断し、本研究では右の眉と目を用いることにした。また鼻および口の類型化については、次回で報告することにする。

表 5 眉，目，鼻，口の相関係数

項 目	眉 長 (実長・左)	眉 幅 (太さ・右)	眉 幅 (太さ・左)	眉 角度 (右)	眉 角度 (左)	眼 裂 長 (右)	眼 裂 長 (左)	眼 間 大 径 (右)	眼 間 大 径 (左)	眼 角 度 (右)	眼 角 度 (左)	鼻 高	鼻 幅	口 裂 長	口 厚 径
眉 (実長・右)	※※ 0.754	※※ 0.374	※※ 0.399			※※ 0.436	※※ 0.433		※ 0.235					※※ 0.317	
眉 (実長・左)		※※ 0.298	※※ 0.339			※※ 0.393	※※ 0.443							※※ 0.273	
眉 (太さ・右)			※※ 0.834			※ 0.199	※ 0.201							※ 0.246	
眉 (太さ・左)						※ 0.203									
眉 角 度 (右)					※※ 0.613					※※ 0.279					
眉 角 度 (左)						※ 0.210	※ 0.242				※ 0.243			※※ 0.286	
眼 裂 長 (右)							※※ 0.570		※ 0.195			※※ 0.454		※※ 0.371	
眼 裂 長 (左)									※ 0.221			※ 0.224	※ 0.195	※※ 0.437	
眼 間 大 径 (右)									※※ 0.581				※※ 0.346		
眼 間 大 径 (左)										※ 0.222	※ 0.234	※ 0.212			
眼 角 度 (右)											※※ 0.392	※ 0.226			
眼 角 度 (左)															
鼻 高														※ 0.214	
鼻 幅														※ 0.241	
口 裂 長															※ 0.251

6. 眉，目の類型化

顔の形態を個性という面から検討しようとするときに，個性とは他と区別され独立的なものであり，あくまでも他にない独自のものでなければならぬ．しかし被服と個性との関係では，一着の被服の色，柄，デザインなどがある個性を持った人のみに適合するかといえばそうではなく，ある傾向を持った群としての特徴が対象になるように思われる．そこで特色をもった群に分類するという意味で今回は先ず，眉，目の類型化を試みることにした．

6-1 眉の類型化と出現率

眉 幅 (mm)	眉 長 (mm)	眉 幅 (mm)				
		1 3.19 ~ 3.69	2 3.70 ~ 4.20	3 4.21 ~ 4.71	4 4.72 ~ 5.22	5 5.23 ~ 5.73
1	0.19	0.7%	1.4%	0.7%		
	0.36					
2	0.37	2.1%	8.5%	9.2%	1.4%	
	0.54					
3	0.55	1.4%	16.9%	29.6%	10.6%	2.8%
	0.72					
4	0.73		1.4%	8.5%	1.4%	2.8%
	0.90					
5	0.91				0.7%	
	1.08					

図 2 眉長，眉幅による類型化と出現率

眉の長さでは投影長と実長の2つの長径を計測したが、実長を用いることにし、眉長と眉幅の標準偏差±3σを用いて5段階に分け、両者の組み合わせによって類型化を試み“図2”に示したが、出現したのは17群であった。なお複合図は眉頭と眉尻を水平線上にして、作成したものである。出現率は図中に示したが、3-3の平均的な眉は眉長の4.21~4.71cmと眉幅の0.55~0.72cmの分類の中にあり、出現率は29.6%であった。

6-2 眉の類型化の例

“図2”の中から代表的なものを選んで“図3”に3例の写真を示したが、1-1は長径、幅径ともに小の眉、4-5は長径、幅径ともに大の眉、3-3は平均的な眉の例である。



図3 眉長と眉幅による類型化の例

6-3 眉長と眉角度による類型化と出現率

眉の角度つまり上り眉、下り眉は個性と関係があると考え、眉長と眉角度の標準偏差を用いて類型化を試み、眉頭を基準点として複合図を作成し“図4”に示した。出現率は図中に示すとおりであるが、全体の中で上り眉は52.7%と過半数を占め、下り眉は31.1%、0度つまり眉頭と眉尻が水平線上にある眉は16.2%と最も少ない出現であった。

眉長 眉角度		眉長				
		1 3.19 ~ 3.69	2 3.70 ~ 4.20	3 4.21 ~ 4.71	4 4.72 ~ 5.22	5 5.23 ~ 5.73
1	-14.10	0.5%		1.8%	1.4%	
	-8.15					
2	-8.14	0.9%	7.6%	9.8%	2.3%	0.5%
	-2.19					
3	-2.18	1.4%	12.1%	24.3%	8.1%	3.1%
	3.77					
4	3.78	0.9%	5.4%	10.3%	4.0%	1.4%
	9.73					
5	9.74		0.9%	2.3%	0.5%	0.5%
	15.69					

図4 眉長、眉角度による類型化と出現率

6-4 眉長，眉角度による類型化の例

“図4”の類型化の中から代表的なもの3例を選んで“図5”に示したが，Aは角度が13度の上り眉，Bは2.0度の水平に近い眉，Cは-1.8度で下り眉の例である。

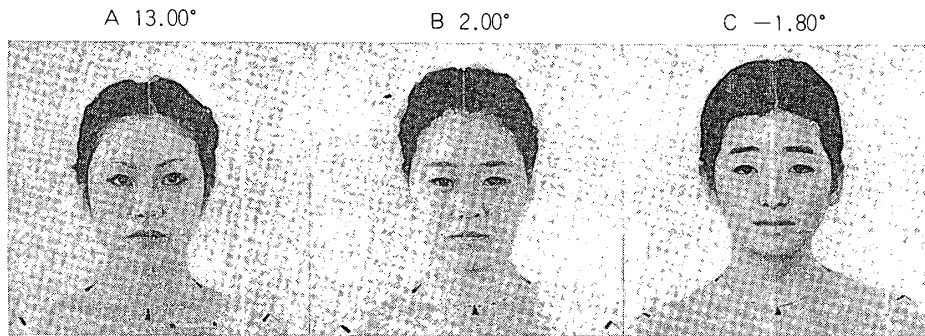


図5 眉長，眉角度による類型化の例

6-5 眉長，眉幅による類型化と出現率（特殊型）

眉の形には俗にいう三日月型，への字型などがあるが，これらの形態が個性とどんな関係にあるかを検討するための資料を得たいと考え“図2”に示した眉長と眉幅による分類の中から三日月型とへの字型を取り出し，分布図を“図6”に示した．三日月の眉は22.5%，への字型の眉は14.0%の出現であった。

眉長 (mm)		眉幅 (mm)				
		1 3.19~3.69	2 3.70~4.20	3 4.21~4.71	4 4.72~5.22	5 5.23~5.73
1	0.19 三日月		2.0%	4.0%		
	0.36 への字					
2	0.37 三日月		8.0%	16.0%		
	0.54 への字		9.7%			
3	0.55 三日月		12.0%	30.0%	14.0%	2.0%
	0.72 への字	3.2%	9.7%	16.1%		
4	0.73 三日月		2.0%	4.0%	2.0%	4.0%
	0.90 への字		6.5%	19.4%	16.1%	3.2%
5	0.91 三日月					
	1.08 への字			9.7%	3.2%	

図6 眉長，眉幅による類型化と出現率（特殊型）

6-6 眉長，眉幅による類型化の例（特殊型）

“図6”の類型化の中から三日月型およびへの字型の眉を各1例取り出して、写真で“図7”に例示した。



図7 眉長，眉幅による類型化の例（特殊型）

6-7 眼裂長，眼開大径による類型化と出現率

眼裂長と眼開大径との標準偏差を用いて，眉の場合と同様に各5段階の組み合わせによる類型化を試みたが，出現したのは18群であった。“図8”は眼頭と眼裂を水平線上にして，複合図を作成したものである．3-3の平均的な目は眼裂長が2.97~3.23cmと眼開大径が0.86~1.09cmの中に含まれるものであり，出現率は29.1%であった。

眼裂長 眼開大径		眼裂長				
		1	2	3	4	5
		2.43 ~ 2.69	2.70 ~ 2.96	2.97 ~ 3.23	3.24 ~ 3.50	3.51 ~ 3.77
1	0.38		0.4%		0.4%	
	0.61					
2	0.62	0.4%	9.4%	7.2%	2.7%	0.4%
	0.85					
3	0.86	0.4%	15.2%	29.1%	8.1%	1.8%
	1.09					
4	1.10	0.4%	3.1%	10.3%	8.1%	1.8%
	1.33					
5	1.34					0.4%
	1.57					

図8 眼裂長，眼開大径による類型化と出現率

6-8 眼裂長，眼開大径による類型化の例



図9 眼裂長，眼開大径による類型化の例

“図9”は“図8”の類型化の中から4例を取り出して示したものであるが、1-2は幅径、長径ともに小の目であり、3-3は平均的な目、また4-3、4-4は幅径、長径ともに比較的大の目の例である。

6-9 眼裂長、眼角度による類型化と出現率

目の角度は眉の角度と同様に個性と関係があると考え、眼裂長と眼角度の標準偏差を用いて類型化を試み、複合図を作成して“図10”に出現率と合わせて示した。全体の中で上り目は99.7%と圧倒的に多く、マイナス記号の下り目は0.5%，また0度つまり眼頭、眼裂が水平線上にある目は1.8%と僅少であった。以上のようにほとんどの者が上り目であるが、これは被験者が若年層であったためと思われる。

眼裂長		1	2	3	4	5
眼角度		2.43 ~ 2.69	2.70 ~ 2.96	2.97 ~ 3.23	3.24 ~ 3.50	3.51 ~ 3.77
1	-5.45 } -0.45				0.5%	
2	-0.44 } 4.55	0.5%	7.2%	12.6%	5.4%	0.9%
3	4.56 } 9.55	0.9%	13.0%	23.3%	9.0%	2.3%
4	9.56 } 14.55		7.2%	9.9%	4.1%	0.9%
5	14.56 } 19.55		0.9%	0.5%	0.9%	

図10 眼裂長、眼開大径による類型化と出現率

6-10 眼裂長、眼角度による類型化の例

“図10”の分類の中から2例を取り出して“図11”に示したが、Aは14.0度で上り目の例、Bは0度の目の例である。

6-11 一重まぶた、二重まぶたの例

目の形態には俗にいう一重まぶた、二重まぶたがあるが、その例を“図12”に示した。出現率は一重まぶたが55.4%と過半数を占め、二重まぶたは33.0%であった。また左右のいずれか一方が一重まぶた、または二重まぶたというアンバランスの目は10.8%であった。一重まぶたが多い傾向を示したのは、東洋人種である日本人の特徴と思われる。

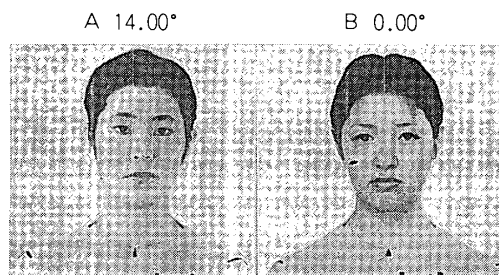


図11 眼裂長、眼角度による類型化の例



図12 一重まぶた、二重まぶたの例

7. 眉、目の位置に関する類型化

両眉間、両目間、眉と目の間隔は個性と関係があると考え、類型化を試みることにした。

7-1 眉頭間隔による類型化と出現率

“図1”に示した左右の眉頭間の標準偏差を用いて5段階に分け類型化を試み、複合図を作成して“図13”に示した。なお出現率は図中に示すとおりである。

7-2 眼頭間隔による類型化と出現率

目の場合も左右の眼頭間の標準偏差を用いて類型化を試み“図14”に示したが、“図13”、“図14”により眉頭間隔、眼頭間隔の各変化を形態により把握することができた。


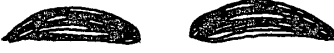



1	1.40 } 1.99		3.6%
2	2.00 } 2.59		18.0%
3	2.60 } 3.19		40.5%
4	3.20 } 3.79		29.3%
5	3.80 } 4.39		8.6%

図13 眉頭間隔による類型化と出現率






1	2.50 } 2.95		1.8%
2	2.96 } 3.41		14.9%
3	3.42 } 3.87		42.3%
4	3.88 } 4.33		36.9%
5	4.34 } 4.79		4.1%

図14 眼頭間隔による類型化と出現率

7-3 眉、目の位置に関する類型化の例

両眉間、両目間のサイズによる類型化を試みた“図13”、“図14”の中から代表的なものを取り出して“図15”に示したが、Aは左右の眼頭間が4.30cmで大の例であり、Bは3.40cmで小の例である。またCは左右の眉頭間が4.00cmで大の例であり、Dは1.60cmで小の例である。Eは眉と目の間隔が0.64cmで小の例、Fは1.90cmで大の例である。なお眉と目の間隔については“図1”に示した眼頭、眼尻の中間位置の計測値である。なお眉・目間の類型化図は省くことにした。

以上の眉、目の位置に関するサイズの大小が、個性とどんな関係にあるかについては、今後の研究課題にしたいと考えている。

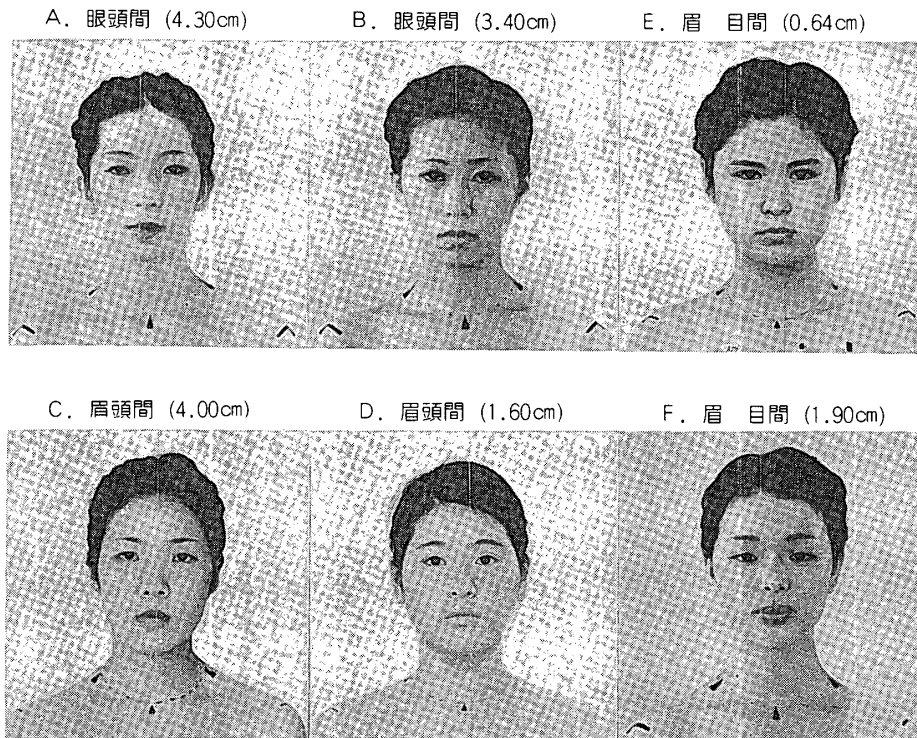


図15 眉、目の位置に関する類型化の例

要 約

被服の着装効果と人の個性との関係を明らかにするために、個性の要素の1つである顔の形態的因子を研究対象とし、本学学生 222 名を被験者として、 $\frac{1}{2}$ 大の写真を用いて各部位の計測をした。

1. 眉、目、鼻、口の長径、幅径、角度

眉、目、鼻、口の各部位の長径、幅径および角度を計測し、最大、最小、平均、標準偏差を求めた。

2. 眉、目の長径、幅径、角度の左右差と出現率

顔の因子の左右アンバランスは個性の研究に必要と考え、眉長、眉幅、眼裂長、眼開大径および眉頭を基点とする眉尻の角度、眼頭を基点とする眼裂の角度の左右差について検討したが、左右同径、および同角度は極めて少なく、各項目ともに約80~90%の者に左右差が認められ、高い出現率であった。

3. 眉、目、鼻、口の相関係数

眉、目、鼻、口の長径、幅径、角度の 120 項目について相関係数を求めたところ、41項目が有意であった。その中で眉長、眉幅、眉角度、眼裂長、眼開大径のおのおの右と左間の相関係数が特に高い傾向を示した。そこで類型化のための資料には、左右のいずれか一方でよいと判断し、本研究では右を用いることにした。

4. 眉、目の類型化

4-1 眉、目の長径、幅径による類型化と出現率

本研究を進めるにあたって、先ず顔の因子の類型化が必要と考え、今回は眉と目を取り上げ、

長径、幅径の標準偏差±3σを用いて5段階に分け、両者の組み合わせによって類型化を試み出現率を求めた。

4-2 眉、目の角度による類型化と出現率

眉長と眉角度および眼裂長と眼角度の各標準偏差を用いて類型化を試みたが、上り眉は52.7%と過半数を占め、下り眉は31.1%また0度つまり眉頭と眉尻が水平線上にある眉は16.2%であった。

目の場合、上り目の出現率は97.7%と圧倒的に高く、下り目は0.5%、0度は1.8%と低い傾向であった。

4-3 眉の特殊型

眉の形には俗にいう三日月型、への字型などがあるが、これらの形態と個性との関係を追求するために類型化を試みたが、全体の中での出現率は三日月型が22.5%、への字型が14.0%であった。

4-4 一重まぶた、二重まぶたの例

目の形態には俗にいう一重まぶた、二重まぶたがあるが、出現率は一重まぶたが55.4%二重まぶたが33.0%、また左右のいずれか一方が一重まぶた、または二重まぶたのいわゆる左右アンバランスの目は10.8%であった。以上のように一重まぶたの者が圧倒的に多かったのは、東洋人種である日本人の特徴を裏付けているものといえよう。

4-5 眉、目の位置に関する類型化

左右の眉頭間および眼頭間の各標準偏差を用いて5段階の類型化を、また眉の下縁と目の上縁間の標準偏差を用いて眉、目間の類型化を試み、眉と目の位置に関する形態を把握した。

以上、眉、目、鼻、口の長径、幅径、角度を数値として確認し、また眉、目について類型化を試みたが、続けて鼻、口の類型化を試みたいと考えている。今後これらの資料をもとにして個性との関係を追求し、更に被服との関係についても明らかにしてゆきたいと考えている。

終りに本研究の資料収集に御協力くださった高梨亨子講師、また被験者として御協力くださった服飾専攻の学生諸姉に、深甚の謝意を表します。

参 考 文 献

- 1) 栃原他2名：名古屋女子大学紀要、第20号 p. 71
- 2) 中尾喜保：生体の観察 p. 248~251, 260 フレンド社 (1965)
- 3) 中尾喜保：被服のためのキネジオロジイ p. 21, 102~104 人間と技術社 (1973)
- 4) 日本人間工学会衣服部会：被服と人体 p. 71~72, 197~198 人間と技術社 (1970)
- 5) 人間工学人体計測編集委員会編：人体計測値図表 p.28~29, 81~91 人間と技術社 (1970)
- 6) 栃原他2名：日本人間工学会誌 Vol. 12, No. 3 p. 82 (1976)